

IIBC NEWSLETTER

July 2018

Vol. **135**

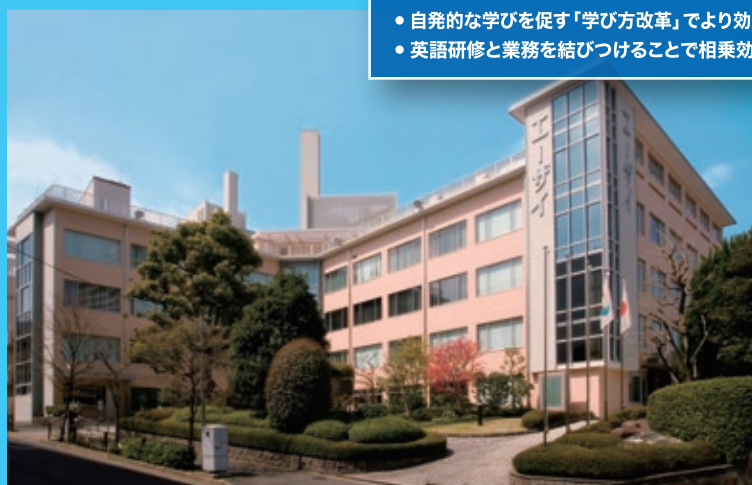


特集

企業と英語研修

- 自発的な学びを促す「学び方改革」でより効果の高い研修づくりに挑む
- 英語研修と業務を結びつけることで相乗効果を生み出す

キヤノン株式会社
エーザイ株式会社



英語がもたらした
私のターニング
ポイント

元女子プロテニス選手
杉山 愛さん → ⑥



高い信頼を生み出す
ETS独自の
採点方式

ETSインタビュー → ⑧



〔特集〕 企業と英語研修

グローバル化の進展、働き方改革と、企業を取り巻く環境が変わる中、
企業における研修のあり方や内容も変化しつつあります。

社員の英語研修に積極的に取り組まれているキヤノン株式会社とエーザイ株式会社、
それぞれのご担当者に、研修への取り組みや変化についてお話を伺いました。

また、長らく企業における英語研修に携わってこられた株式会社アイ・シー・シー代表の千田潤一氏に、
効果のある英語研修のあり方について伺いました。

自発的な学びを促す「学び方改革」で より効果の高い研修づくりに挑む

キヤノン株式会社

人事本部
ヒューマンリレーションズ推進センター所長
理事
細谷 陽一 氏

市場のグローバル化により英語力が必須に

当社の昨年の売上は約4兆800億円で、8割を海外が占めています。グローバル化が進展するにつれ、海外の従業員も増大し、約19万人いるグループ社員のうち12万人ほどを外国人が占めています。日本人社員約7万人のうち、海外に赴任している数はおよそ1,000人。以前の海外赴任先は欧米が中心でしたが、ここ10年くらいは約6割がアジアとなっていて、残り各2割を欧州と米国が占めています。

国内で働く技術職の社員の中には、海外での知的財産権の申請や学術論文の閲読など、高い英語力を求められる者もいます。また、そこまで専門的な用語を必要としないまでも、商品パッケージやマニュアルなどの表記は英語が主ですので、ほとんどの社員が何らかの形で日常的に英語に触れています。したがって、国内外を問わず英語力は必須となっているのが現状です。

「働き方改革」を推進しつつ「学び方改革」にも取り組む

当社では英語、ビジネススキル、リーダーシップを始めさまざまな研修を業務研修として行ってきています。

一方、昨今では「働き方改革」の進展に伴い、業務研修にあてる時間を創出しにくい風潮もあり、必須型研修はともかく公募型を中心に学びの機会が遞減してきている傾向にあります。

こうした状況を打破すべく取り組んでいるのが「学び方改革」です。研修を自発的に受けもらう機会を週末、そして終業後に創出しています。もともと自己啓発型の研修はありましたが、その機会を週末も含めて提供していることが、「学び方改革」の特徴です。

「土曜日の研修だと育児を主人に頼めるので参加しやすい」という女性社員の声も聞かれるようになりました。

キヤノンには「自発・自治・自覚」からなる「三自の精神」という行動指針があります。これは何事に対しても積極的に臨み、行動する（自発）、自らをきちんと管理する（自治）、自分の立場・役割・状況を把握し、前向きに仕事に取り組む（自覚）から構成されており、学び方改革はこの三自の精神を土台としたものでもあります。



「学び方改革」で実践する新たな研修

学び方改革の一環として、2017年秋から開始したのが、京浜地区のオフィスで土曜日に研修を行う「ウィークエンドラーニング」(以下、WEL)です。分野としてはプレゼンテーションなどのビジネススキルや英語研修などになります。WELは業務研修ではありませんので、交通費は自己負担です。にもかかわらず、茨城や静岡から参加する社員もいて、社員の自己学習意欲に対応する取り組みとして手応えを感じています。

そしてもう1つの取り組みが「アフター5ラーニング」(以下、A5L)です。WELと比較すると研修時間は1.5時間程度と短くなりますが、WELへの呼び水の的な位置づけとしています。

ちなみに、当社では2012年から7・8・9月の3ヵ月間を「ワークライフバランス推進期間」と題し、サマータイムを導入しています。具体的には就業時間を45分間前倒しし、終業後にできた時間を、A5Lにあててもらおうようキャンペーンをしています。このA5LもWEL同様に自己啓発型の研修で上司の承認を不要とし、あくまでも社員本人の意思で参加できるようにしています。自己啓発スタイルは参加者の意欲が高く、特に週末の研修においては研修効果が向上している実感があります。



ワークライフバランス推進期間中は、「年金」「税金」「健康」などの生活関連のテーマもセミナー形式で提供していますが、その中でも人気が高いのが「英語」です。業務ではもちろんのこと、訪日観光客の増加や東京オリンピック・パラリンピックの開催など、英語学習への世間の関心が高まっていることと呼応して、社員の中にもプライベートにおける英語の重要性を実感している表れのようにも感じています。

これらWEL、A5Lは基本的には外部研修会社に委託するのではなく、自社で企画開発・運営しています。英語関連の研修ではTOEIC® Programのスコアアップを目指すことはもとより、英語学習を楽しんでもらうことを意識しています。

また、英語力の向上を底上げするために、TOEIC Programに対する心理的バリアーを取り除くべく初級者向けの「聞く」「読む」力を測定するTOEIC Bridge® Testをワークライフバランス推進期間に実施し、毎年約300人が受験しています。TOEIC Bridge Testの受験者の中からは、より上位のTOEIC® Listening & Reading Testを受ける者も増加しており、TOEIC Bridge Testをきっかけとして段階的にステップアップしてほしいと願っています。また、研修を実施した後は受講者の感想や英語で伝える日常表現をメルマガで配信、社員の英語学習モチベーション持続のための工夫をしています。

創業の地で薫陶を受ける幹部研修

このCanon Global Management Institute (CGMI)は幹部研修のための施設です。ここはキヤノン創業の地でもあり、先人達の魂が宿る土地でキヤノンのDNAを継承し、幹部としての自覚と見識を養うことを目的に建てられました。

幹部研修の1つには、課長・部長・所長クラスを対象とした「Leadership Education and Development (以下、LEAD)」というものがあります。LEADは役職に任用する前後でイニシアチブや主導力の発揮の仕方について指導するのですが、LEADを受けたからといって、必ずしも役職が与えられたり昇格したりするわけではありません。各部門で推薦された人材が、実際にはどのような行動特性を持っているのかなど、人事の目で人物を把握し、最終的にその役職へ就かせるかどうかを判断しています。



Canon Global Management Institute (CGMI)

「進取の気性」で「学び方改革」を推進

グローバル人材として外国の人達と協働するには、その国の文化を理解することが大切です。異文化理解は現地での実践に勝るものではありませんが、日本でできることとして、海外からのインターン学生達と交流を深める「異文化祭り」を実施しています。その他、「技術留学制度」「海外トレーニー制度」そして海外赴任前には「国際スタッフ研修」「基礎マネジメント研修」など、多彩な研修を用意しています。

前述の三自の精神と共に私たちが大切にしているのが、三自の精神を具体的な行動に昇華させる「進取の気性」です。自発的に受ける研修の効果が高いように、個人の内面から湧き出るエネルギーは何にも増して重要です。働き方改革の進展に伴い、業務研修にあてる時間を創出しにくい風潮もある中、社員には今こそ学ぶチャンスだと捉え、自らの時間を自らの意思による成長機会にあててもらいたい。そのためにも学び方改革のメニューをさらに充実させ、社員の学ぶ意欲に応えていきたいと考えています。

英語研修と業務を結びつけることで 相乗効果を生み出す

エーザイ株式会社
エーザイ・デマンド・チェーン・システムズ

戦略企画部
日本・アジアタレントマネジメントグループ

グループ長
松永 浩史 氏 | 中西 拓也 氏

工場のグローバル化に伴い海外とのやり取りが増加

松永氏 私たちが所属するエーザイ・デマンド・チェーン・システムズ(EDCS)は製薬企業であるエーザイにおいて生産を担う部門です。当社は1970年にインドネシアに製造会社を設立したのを皮切りに海外への工場展開を進め、現在ではアメリカ、イギリス、中国、インド、インドネシアで工場を稼働しています。進出当初はそのエリア向けの医薬品供給が中心でしたが、今では海外から日本へ、日本から海外へ、そして海外から海外へと製品などを供給する体制を

敷いています。積極的に海外展開を進めた結果、今では部門の従業員の半数以上を外国人が占めるようになりました。また、日本の工場でも海外工場との情報交換や海外当局との協議など英語を使う場面が増えており、工場従業員のうち2~3割は英語を使う環境に置かれています。海外志向のある生産技術・管理者にはまさにうってつけの環境です。最近では学生もそれをよく知っていて、EDCSを志望するグローバル志向の学生が増加しています。

日本と海外の社員を交流させる「グローバルモビリティ」

中西氏 EDCSでは研修で学んだことをアウトプットできる仕組みを大切にしています。中長期的な視点でグローバルビジネスリーダーを育成することを目標とし、2つの研修を展開しています。

その1つが、2000年に開始した「グローバルモビリティ」というプログラムです。グローバルモビリティは国を超えて社員を短期間派遣するプログラムで、例えば「日本からアメリカへ」「インドから日本へ」、といったさまざまなパターンがあります。日本から海外の工場へ派遣する期間は1ヵ月~6ヵ月で、最近では毎年3名程度を派遣しています。毎年応募者が定員を上回るため、面接を通じて目的やキャリア像がより明確で、その実現に向けた強い意志を持つ社員を選抜しています。また、面接後、応募者1人1人にフィードバックをすることも大切にしています。仮に面接で不合格になったとしても、彼らに気づきを与えることができ、その後のモチベーションの維持・向上に直結するためです。

松永氏 単に海外で過ごす、というだけでは効果が不十分であるため、業務と研修を交えたプログラムにしています。業務を通じて現地の人とコミュニケーションを図った結果、技術面での成長のみならず、お互いの文化の理解が深まることもメリットの1つだと感じています。実際、過去に日本から派遣した社員の多くが現在もグローバルな役割を担っています。

一方、海外工場から日本へ来るケースにおいて、ほとんどの派遣者は日本語を話せないため、日本で受け入れる社員は英語でコミュニケーションしなければなりません。現状ではまだコミュニケーションに苦労するケースもみられますが、今後スムーズに受け入れられるよう各組織をレベルアップしていくことが私たちの目標です。



グループ長 松永 浩史 氏

中西 拓也 氏

英語を使って異文化理解を深める「英語研修」

松永氏 日本国内のみで実施しているもう1つの研修が、3年前から導入した「英語研修」です。入社2年目の若手、昇格直後の中堅社員、および登用直後の管理職を対象としています。

世界中で英語を教えた経験があり高いスキルを持つ外国人講師を招き、2日間×2回、計4日間で構成される研修です。研修中は一切日本語禁止のため、参加者は四苦八苦しながら学んでいます。本研修での学びをアウトプットするため、受講者に対してはグローバルモビリティで来日した海外社員のアテンド役をお願いします。

この英語研修はグローバルモビリティ同様、「英語で異文化とのコミュニケーションをとること」を根幹に置き、とにかく手と口を動かす実践的なスタイルになっています。講師と綿密な打ち合わせを重ねて当社独自のプログラムを策定しており、さらに毎年改善を加えています。

TOEIC® Testsは研修成果のベンチマーク

中西氏 英語研修の前後にはTOEIC® Testsを研修参加者に受験してもらい、研修成果のベンチマークとして活用しています。特に、昨年から従来のTOEIC Listening & Reading Testのみならず、TOEIC® Speaking & Writing Tests(以下、TOEIC® S&W)を導入しました。積極的なコミュニケーションを実践するためには話すことと書くことが特に重要です。TOEIC S&Wは日々の業務で経験するような実践的な問題が多くあり、研修の成果を確実に

測定する指標として役に立っています。研修後は、スコアが上昇している社員が多く、結果のフィードバックを通じて社員の英語に対するモチベーションにもなっているという声をよく聞きます。



研修はあくまでも1つの手段

松永氏 私たちは英語研修を単体で独立させるのではなく、業務と連携させることで、より効果のあるものになりたいと考えています。したがって受講者には、実際に業務で英語を使う機会をどんどん与えていくようにしています。

今後は研修を行うだけでなく、どういう職場を経験させるかなど、計画的なキャリア形成が重要になると考えています。研修は

あくまでも1つの手段ですので、研修に限らず英語に触れる機会を増やし、グローバルビジネスリーダーを育成するという目的を達成できるようさまざまな工夫をしていくつもりです。



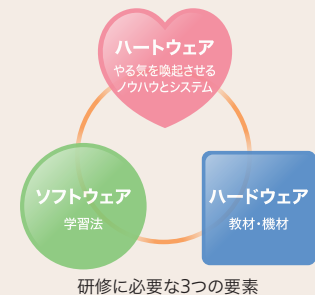
企業研修担当者の皆様へのメッセージ

企業における英語研修の成否は「やる気」の喚起にかかっています

株式会社アイ・シー・シー 代表取締役 千田 潤一 氏

「研修担当者」がモデルとなって「やる気」をアップさせる

英語研修の成否は、受講者の英語に対するモチベーション、つまり「やる気」にかかっていると言っても過言ではありません。私は「やる気」アップのノウハウとシステムを「ハートウェア」と呼んでいますが、英語研修における最も効果的なハートウェアは「研修担当者」が率先して成功モデルとなることです。往々にして多いのが、英語から「逃げ切ろう」としている40、50代の管理職層ですが、研修担当の部長や課長が自分たちで作上げた研修システムに則って英語能力を向上させれば、同年代を含めた全社員にとってこれほど説得力を持つものはないでしょう。全社員の英語力向上に頭を悩ませている研修担当の方々にはぜひ率先して取り組んでいただきたいと思います。



TOEIC® スコアを活用して、自ら学ぶ環境作りを

英語研修の前後でTOEIC Testsを使って効果測定をされている企業も多いと思いますが、気をつけてほしいのは受講者の平均点だけではなく、50点以上伸びた人が何%、100点伸びた人が何%といった「歩留り」もあわせて参考にするということです。

また、Listening(以下L)とReading(以下R)のスコアは別々に見るよう社員にアドバイスするのもよいでしょう。スコアを別々に見ることで、自分は、「Rは強いけどLは弱い」といった弱点を把握することができ、今後どちらを重点的に学べばいいのかを理解することができます。そうすることで次への学習目標が立てやすくなります。スコアをうまく活用して、社員が自分の英語スキルの位置を確認しながら、目指すレベルに向かって自己学習を始める環境を作ることが、研修担当者の一歩の腕の見せ所ですね。



千田 潤一(ちだ・じゅんいち)

1948年岩手県生まれ。福島大学経済学部卒業後、タイム、AIU、TOEICテストを普及する国際コミュニケーションズを経て、1990年に英語教育コンサルティング会社(株)アイ・シー・シーを設立し、代表取締役役に就任。英語トレーニング法指導の第一人者として、企業から大学・高校・中学まで幅広く講演活動を行っている。

英語はテニスのトッププロにとって 必須のスキルであり、 大切なコミュニケーションツール

4歳でテニスをはじめ、17歳でプロデビュー。WTA(女子テニス協会)の自己最高ランキングはシングルス8位、ダブルスでは日本人選手初の1位を獲得するなど、数々の記録を樹立した杉山愛さん。テニスを通じて学んだ英語力、トップ選手としての英語へのかかり方、英語を通じて手に入れたものなどについて語っていただきました。

元女子プロテニス選手

杉山 愛さん



テニスレッスンで試した初めての英会話

テニスはもともと両親が趣味でやっていて、コートに連れていってもらった際に、ラケットを握って遊んでいたのがテニスと触れ合うきっかけでした。両親はクラシックバレエやフィギュアスケート、水泳など、さまざまなスポーツをやらせてくれましたが、そのなかでもテニスがお気に入りでした。週1回の練習だったのが2回、3回と、プレーする時間や回数が徐々に増えていき、最後はテニス一本に絞りました。本格的に打ち込みはじめたのは、小学2年生のときでした。ニック・ポロテリー・テニス・アカデミー(現:IMGアカデミー)というアメリカのフロリダにあるテニスアカデミーの日本校が家の近くにできて、そこに入学しました。将来、プロになって海外で活躍したいと思い始めたのもこの頃です。

アカデミーでは本場のコーチによる指導が受けられ、ネイティブスピーカーが話す生の英語を体感することができました。はじめて話す外国人との会話は刺激的な経験でしたし、自分でも積極的に話したいと思っていましたので、学校の用事で遅れたときには母親になんと伝えればいいのかを聞いて、“I'm sorry. I'm late.”とコーチに直接、英語で伝えるなどのチャレンジをしていました。今思えば、本当に恵まれた環境で、低学年のうちに実戦の場で英語を聞く、話す機会があったという経験は、その後の人生に大きな影響を残したと思います。

テニスのステージにより、求められる英語力も変わる

はじめて海外遠征に出かけたのは小学6年生でした。その後、ジュニアを経て、17歳でプロデビューを果たしましたが、テニスは、戦うステージが上がるごとに、英語力も相応に求められるスポーツだと実感しました。特に、プロ選手ともなると、メディア対応が求められるようになります。活躍すればするほど、記者会見やインタビューの機会が増えますので、アマチュア時代とは比較にならない英語力が要求されました。当初は質問の英語が聞き取れず、2、3回と聞き返しているうちに記者に「もういいよ」と言われることや、質問の意味すらわからないこともあり、ショックでしたね。ただでさえ試合のことで頭がいっぱいなのに、英語で何かを発信しなければならぬというのは、本当に苦痛でしかありませんでした。

ランキングもトップ10入りを果たすと、毎週月曜日にメディアのための時間が用意されていて、1時間ほどインタビューを受けます。つまり、テニスのレベルが上がると同時に求められる英語力も上がってきたのです。最初のうちは、うまく対応できずにもどかしい思いを何度もしました。それでも、好きな英語のテレビを見ることや、趣味の読書でも英語の本を読んだりして限られた時間を有効に使いつつ、他の選手のウィナーズスピーチなどの受け答えを参考にして、使えるセンテンスを記憶するなどの努力を重ね、英語力の向上をはかりました。

最近は、始めてまだ日が浅いのですが、若手選手のコーチングを行っており、今度は指導者としての英語力が求められています。ステージが変わると違った英語力が求められるんだと痛感しています。

マインドを変え、異郷の地を居心地のよい場所に変える

海外へ出かけると、誰しも苦手なものや嫌いなものがあると思います。ただそう考えてしまうと、以前の私は、すぐに次の大会に意識が向いて、今いる場所から出ていきたくなくなってしまっていたんですね。それってすごくもったいないことだと気付いたんです。結局は自分の受け取り方ひとつですので、なるべくその土地のいいところを見つけて、そこが居心地のいい場所になるよう意識していました。

その土地の文化や風習のなかから、自分の好きなものを見つけるという作業を続けることで、嫌いなものがやがてニュートラルになり、ニュートラルなものがだんだんいいなと思えるようになります。これはツアーを離れた今も続けていることで、そうすることで、どんな場所も、人も好きになれるような気がします。嫌いなものだけにフォーカスするのではなく、今いる場所や目の前にあることに集中することで、ポジティブなマインドを獲得する、これはテニスだけではなく、言語習得などいろいろなことに通じる要素のかなと思いますね。



英語を通じて獲得した、かけがえのないもの



私は、17年間というテニス選手としては長い期間、競技者生活を送ることができました。これも素晴らしい仲間を支えられたおかげです。彼らとは今でも交流が続いています。年に5、6回は海外に行く機会があり、グランドスラムなど会場で再会できたときには、時間が許す限り近況を報告しあったりしています。かけ

がえのない友人ができたのは、英語のおかげですし、彼らは私の大切な財産です。

今、息子が2歳10ヶ月になりましたが、彼にもぜひ英語を習得してもらって、私がテニスを通じて体験したような、素敵な交流を楽しんでほしいと願っています。夫は帰国子女なので、家では夫が英語で、私が日本語で話しかけています。私が子どもの頃は外国人が話すような英語にあこがれて、巻き舌を真似するのが精一杯でしたが、息子は最近英語の問いかけも理解し始めているようで、「子どもの吸収力の高さ、可能性ってすごいんだな」と日々、驚きでいっぱいです。

自分の考えや思いを発信し、相手のそれを受けることが重要

テニスを通じて、世界を舞台に戦ってきた感じたことは、綺麗な英語や正しい英語を話せることも大切ですが、それより何より、自分の考えを相手にきちんと伝えられること、つまり、「コミュニケーションツールとしての英語を身につけること」が大切なんだと思います。私は、海外の人たちとのコミュニケーションにおいて、会話の終着点必ずしも一緒じゃなくても構わないと考えています。それよりも「私はこうです。あなたはそうなのね」とお互いが理解し合える。自分の考えや思いを発信し、今度は相手のそれを受け、こういったやりとりがきちんとできることが重要だと考えています。



そのための準備は、日々の暮らしのなかで実践できると思います。例えば、普段からニュースや出来事などに対して自分の意見をしっかりと持つことが大切です。そして、自分の意見を相手に伝えることも有効だと思います。

現在、テレビでコメンテーターのお仕事をやらせていただけていますが、番組中にコメントをしてみると、意外と自分のなかでも考えが整理されていないことが多いんだなと感じています。

コミュニケーションとは非常に奥深いもの。日々の積み重ねが豊かなコミュニケーションにつながるのだと思います。

高い信頼を生み出す ETS独自の採点方式

TOEIC Programの開発・制作機関であるアメリカの非営利団体Educational Testing Service (以下、ETS)は世界180カ国以上、9,000カ所以上において、年間5,000万件以上のテストの開発、実施、採点を行っています。そのためETSは、多くの分野の専門家を雇用しています。彼らはヒューマンエラーの可能性を熟知しており、ヒューマンエラーを極力減らし、信頼性を最高水準にまで高める独自の採点方式の開発と実施に取り組んでいます。その結果、TOEIC Programは世界中で信頼され、幅広く利用されています。今回、来日したTOEIC Programのエグゼクティブ・ディレクターのDr. Feng Yuと、ストラテジックマーケティングを担当するシニアディレクターのMrs. Magali DaumasにETS独自の採点システムについて伺いました。



Dr. Feng Yu

ETSでエグゼクティブ・ディレクターとしてTOEIC Programのマネジメントを担当



Mrs. Magali Daumas

ETSでシニアディレクターとしてTOEICストラテジックマーケティングを担当

TOEIC® Testsは英語4技能におけるコミュニケーション能力の上達につながる

—4技能をバランスよく身に付ける上で、TOEIC Listening & Reading Test (以下、TOEIC L&R)とTOEIC Speaking & Writing Tests (以下、TOEIC S&W)はどのように役立つのでしょうか。

Mrs. Magali Daumas

英語による優れたコミュニケーション能力を身に付ければ、個人の活動範囲を広げることができるのは周知の事実です。英語を駆使して有意義で理路整然としたコミュニケーションを取るためには、受動的な能力

(ListeningとReading)を使って情報を正確にインプットし、能動的な能力(SpeakingとWriting)を使って適切なメッセージをアウトプットできなければなりません。

TOEIC L&RとTOEIC S&Wを受験することで、重要な4技能の幅広い英語によるコミュニケーション能力について全体像を明確に把握できます。

確かな信頼を誇る独自の採点方式

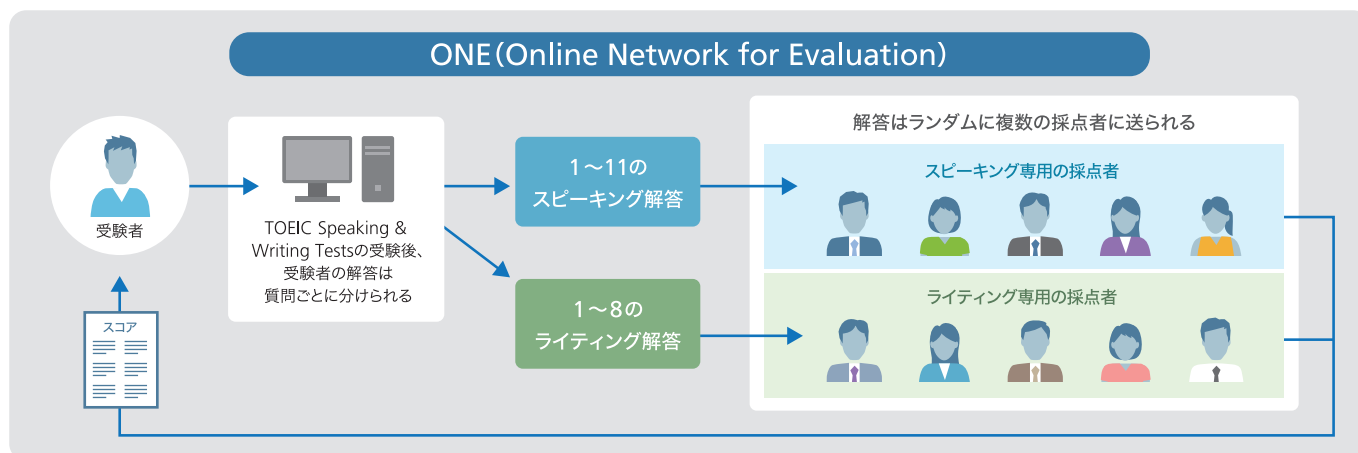
—TOEIC S&Wの採点で独自の方式を取っているのはなぜでしょうか。

Dr. Feng Yu

ETSは採点方式の開発において70年以上の経験があり、テストの採点プロセスにヒューマンエラーが生じるのは避けられないことを知っています。特に英語のSpeakingとWritingのテスト採点にその傾向が強くみられます。ですからETSは、偏見、先入観などを含めたヒューマンエラーの発生を最小限にするために、多くの方式やプロセスを開発してきました。TOEIC S&Wの解答はONE(Online Network for Evaluation)というシステムを通じてETSの訓練を受けた有資格のヒューマンレーター(採点者)が採点します。採点は、クエスチョンごとに無記名で行われます。受験者ごとにSpeaking、Writing

それぞれ最低3人の採点者が振り分けられるようになっていますが、TOEIC S&Wでは平均して10人の採点者が採点を行っています。採点者は担当しているクエスチョン以外、受験者のスコアを見ることができません。さらに受験者のバックグラウンドを隠して解答をランダムに採点者に割り振ります。そうすることで先入観や偏見などが入った不適切な採点を防いでいます。つまり、この採点システムの特徴は1人の受験者でもクエスチョンごとに複数人が採点するので、採点者1人に偏った採点を防ぐことができます。また各採点者は毎日、採点の正確度を測る「カリブレーションテスト」に合格しなければなりません。このテストに合格できなければ、その日は採点することができません。

ONE(Online Network for Evaluation)



—TOEIC S&Wの採点システムで他に特徴はありますか。

Dr. Feng Yu

TOEIC S&Wの別のユニークな特徴は、設問ごとに具体的な採点基準が付いていることです。すべての採点者はこの採点基準に厳格に従います。各採点基準にはスコアのポイントを0～5などの数字で示しており、採点の正確性を最大限に高めます。スコアのポイントが0～2など範囲

が狭すぎると、受験者のスコアのばらつきが十分できず、適正な採点とはいえません。一方で、スコアのポイントを0～8など広い範囲で設定すると、採点の正確性が低下し、ひいてはテスト全般の信頼性の欠如にもつながります。そこでTOEIC S&Wでは、ETSの専門家による定性・定量分析の結果に基づき、適正であると判断した0～3、4、5（設問によって変更）のスコアポイントを使用しています。

有能な採点者の採用で品質を維持

—採点者の採用基準を説明してください。

Mrs. Magali Daumas

TOEIC Programの採点者は正式に認可を受けた大学の学士以上の学位を持ち、ESLなど、英語の非母語者への指導経験がなければなりません。

第一段階の採用審査を通過した後、採点者用の訓練を受ける必要があります。訓練後、正式なTOEIC Programの採点者になるために認証テストに合格する必要があります。ETSの採点専門家がこの全プロセスに深く関わって、有能な人物の採用をしています。

採点者の採用基準

① 応募



学歴や英語指導経験などを考慮して書類審査

② トレーニング



オンラインで集中的なトレーニング

③ テスト



採点のテストを受ける

④ 合格者のみ登録



採点者になれる

—採用後も採点者は常にテストを受けるのですか。

Dr. Feng Yu

そうです。先ほど採点プロセスについてお話した際に「カリブレーションテスト」について触れました。採点者は毎日「カリブレーションテスト」と呼ばれる採点の正確度を測るテストに合格しなければなりません。クエスチョンごとのガイドラインに沿って採点することが求められますが、設問を割り振られても「カリブレーションテスト」に合格できなければその日は採点することが許されません。

ETSの採点スタッフは「採点者」、「スコアリングリーダー」、「チーフスコアリングリーダー」、「ETSアセスメントスペシャリスト」という4段階の指揮系統に分かれています。TOEIC S&Wの採点者の作業状況は、通常スコアリングリーダーがモニタリングして、採点の完全な正確度の達成を目指します。スコアリングリーダーとテストの開発担当者は、採点中および採点終了後に統計的に採点者の作業状況をモニタリングします。スコア結果の発表に先立ち、統計専門家はすべてのスコア結果を吟味・分析をします。

採点の品質維持

① カリブレーションテスト



採点前にテストを受けて合格しなければ、その日は採点することができない

② スコアリングガイド



受験者1名の解答につき、各テスト3名以上の採点者によって設問ごとに評価される

③ 採点のモニタリング



スコアリングリーダーなどが採点のモニタリングをしている

求められる専門性と英語でのコミュニケーション能力

—日本だけでなく世界でもTOEIC Programの受験者は増加傾向にあるのでしょうか。

Dr. Feng Yu

はい、受験者は世界中で増加しており、現在の世界での受験者数は、約700万人。スコア結果は160カ国以上で1万4,000以上の企業や団体で利用されています。

世界中のこうした企業や団体は資源の確保や市場拡大の競争を激化させていますが、そのためには優秀な人材の採用と維持が不可欠です。これまでは特定の分野を任せる専門性の高いスキルを持つ

人材の採用が最重視されていましたが、今ではこうした人材は専門性だけでなく、グローバルに通用するコミュニケーション能力をマスターすることが求められています。

テクノロジーとコミュニケーションの手段が毎日進化する中、翻訳・通訳者をビジネスの現場で利用することが一般的ではなくなりつつあります。ビジネスパーソン同士が直接英語でコミュニケーションをとる場面が増えているのです。そうした傾向はTOEIC Program利用の増加にも反映されています。

国際的なイベントでもTOEIC® Programを活用

—国際的なイベントでTOEIC Programはどのように活用されていますか。

Mrs. Magali Daumas

TOEIC Programはいくつかのオリンピックで採用され、ボランティアの英語スキルの評価基準、またスコア結果に基づくポジションの配置などに活用されてきました。オリンピックでのTOEIC Program活用の歴史は1988年のソウル・オリンピックにまでさかのぼり、今日に至ります。

TOEIC Programは他の多彩な国際イベントでも活用されてきました。2013年にブラジルで開かれたFIFAコンフェデレーションズカップ・ブラジル大会などのスポーツイベントから、中国や韓国で開催された20カ国・地域(G20)外相会合、ロシアでのアジア太平洋経済協力(APEC)首脳会議などの政治会合・会議などでも活用されました。また2020年にアラブ首長国連邦(UAE)で開かれるドバイ国際博覧会(ドバイ万博)では、タクシードライバーの英語力を測定するためTOEIC Bridge Testの活用が決まっています。



英語の練習を毎日行うことが大切。学習は継続のプロセス

—最後に日本の英語学習者へメッセージをお願いします。

Dr. Feng Yu

他のスキル同様に、英語も上達のためには毎日の練習が必要です。スポーツのスターには一夜にしてなれませんが、英語にも同じことがいえます。いかなるスキルであれその上達には熱心さと根気が要求されます。英語でコミュニケーションをする頻度をできるだけ多くとること。できるだけ多くの異なる状況の中で練習するのも大事で、英語で友人と会話をしたり、英語のテレビ番組を見たり、英語で読書をするなどすべてのチャンスを生かすことです。それから間違えることを恐れなくてください。間違えることは、多くを学ぶことができるチャンスでもあるのです。

Mrs. Magali Daumas

TOEIC Bridge Testも2019年からSpeakingとWritingが加わり、4技能を測るテストに進化します。今日のグローバル環境における英語の利用状況とコミュニケーションのタスクをより良く反映させたテストへと生まれ変わる予定です。英語初中級の方にはTOEIC Bridge Testで4技能に慣れていただき、TOEIC Testsへつなげていただきたいと思います。



Educational Testing Service (ETS)

第10回 IIBCエッセイコンテスト開催

テーマは『私を変えた身近な異文化体験』
 ～第10回を記念し、副賞に海外短期派遣プログラム(AFS)を3名に贈呈～

IIBCでは、今年も高校生を対象とした英語エッセイコンテスト『第10回 IIBCエッセイコンテスト』を開催します。

本コンテストは、2009年度から実施され、これまでの累計応募数は、本選672校1,006作品、奨励賞は164校9,420作品となりました。また2018年度は、第10回を記念して、最優秀賞、優秀賞、優良賞の受賞者に海外短期留学プログラム(AFS)を贈呈します。



第9回 IIBCエッセイコンテスト表彰式

第10回 IIBCエッセイコンテスト

後援: 米国大使館 協賛: 一般社団法人 日米協会

応募受付中

応募資格 日本国公私立高等学校、高等専門学校(1～3年)および中等教育学校(4～6年)に在学する生徒

使用言語 英語

応募作品 エッセイ 501～700語

応募期間 2018年6月1日(金)～9月5日(水)17時まで

IIBCエッセイコンテスト事務局主催

高校生対象・エッセイライティングワークショップ

関連イベント

本コンテストの参加を予定している高校生を主な対象に、英文エッセイの書き方を学ぶワークショップを開催します。このワークショップでは、日本語の『作文』とは異なるルールを持つ英文エッセイの書き方について学ぶことができます。エッセイコンテストはもちろんのこと、将来の進学先や留学先で役立つ効果的な英文エッセイの書き方を学ぶことができます。

東京 2018年7月24日(火) 10:00～16:30(受付開始:9:30)
会場:(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 会議室

大阪 2018年7月25日(水) 10:00～16:30(受付開始:9:30)
会場:(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 会議室

エッセイコンテスト、ワークショップの詳細は > **IIBC公式サイト** <http://www.iibc-global.org/iibc/activity/essay.html> をご覧ください。

2017年度TOEIC® Program総受験者数は約270万人

TOEIC® Speaking & Writing Testsは前年度比18%UP

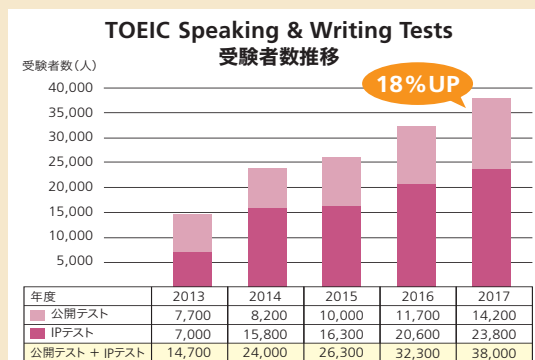
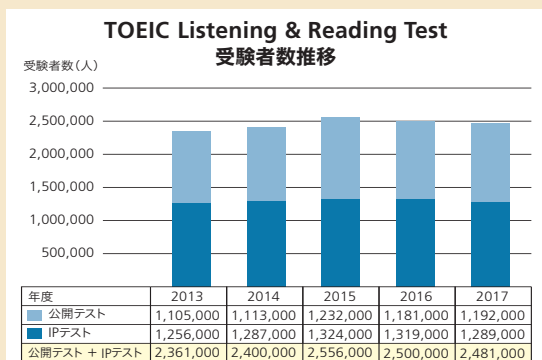
2018年4月9日、IIBCは2017年度のTOEIC Program受験者数を発表しました。

TOEIC Programの受験者数は合計で約270万人となりました。特に、英語で話す・書く力を測るニーズの高まりもあり、TOEIC Speaking & Writing Testsの受験者数は38,000人と2016年度

と比較して18%増加。同テストを開始した2006年度から連続で受験者数は増加しています。

企業・団体・学校などの採用団体数はTOEIC Program全体で約3,600となり、グローバル人材育成における英語力の指標として、TOEIC Programの活用は引き続き堅調に推移しています。

TOEIC Tests受験者数の推移(2013年度～2017年度)



公開テスト・・・当協会の管理下で実施し、個人が直接申し込みをする受験制度
 団体特別受験制度(IPテスト)・・・企業・大学などの団体が、所属社員・学生を対象に随時実施する受験制度
 2017年度のTOEIC Bridge Testの受験者数は18万4,000人

公開テストスケジュール

TOEIC® Listening & Reading Test



回数	試験日	申込期間 ^{※1}	結果発送予定日
第232回	2018年 7月 29日(日)	2018年 5月 18日(金) ~ 2018年 6月 19日(火)	2018年 8月 28日(火)
第233回	2018年 9月 9日(日)	2018年 6月 22日(金) ~ 2018年 7月 24日(火)	2018年 10月 9日(火)
第234回	2018年 10月 28日(日)	2018年 7月 27日(金) ~ 2018年 8月 28日(火)	2018年 11月 27日(火)
第235回	2018年 11月 18日(日)	2018年 8月 31日(金) ~ 2018年 10月 9日(火)	2018年 12月 18日(火)
第236回	2018年 12月 9日(日)	2018年 10月 12日(金) ~ 2018年 10月 30日(火)	2019年 1月 8日(火)
第237回	2019年 1月 13日(日)	2018年 11月 2日(金) ~ 2018年 12月 11日(火)	2019年 2月 12日(火)
第238回	2019年 3月 10日(日)	2018年 12月 14日(金) ~ 2019年 1月 29日(火)	2019年 4月 9日(火)

TOEIC® Speaking & Writing Tests

TOEIC® Speaking Test



試験日	申込期間 ^{※2}	結果発送予定日
2018年 7月 1日(日)	2018年 5月 18日(金) ~ 2018年 6月 15日(金)	2018年 7月 30日(月)
2018年 8月 5日(日)	2018年 6月 15日(金) ~ 2018年 7月 20日(金)	2018年 8月 31日(金)
2018年 9月 16日(日)	2018年 7月 20日(金) ~ 2018年 8月 31日(金)	2018年 10月 15日(月)
2018年 10月 14日(日)	2018年 8月 31日(金) ~ 2018年 9月 28日(金)	2018年 11月 9日(金)
2018年 11月 4日(日)	2018年 9月 21日(金) ~ 2018年 10月 19日(金)	2018年 12月 3日(月)
2018年 12月 2日(日)	2018年 10月 19日(金) ~ 2018年 11月 16日(金)	2018年 12月 28日(金)

TOEIC Bridge® Test



回数	試験日	申込期間 ^{※2}	結果発送予定日
第68回	2018年 9月 2日(日)	2018年 5月 14日(月) ~ 2018年 8月 2日(木)	2018年 10月 5日(金)
第69回	2018年 11月 4日(日)	2018年 8月 6日(月) ~ 2018年 10月 4日(木)	2018年 12月 7日(金)
第70回	2019年 3月 17日(日)	2018年 11月 5日(月) ~ 2019年 2月 7日(木)	2019年 4月 19日(金)

*上記は個人でお申し込みいただく際の申込期間です。団体一括試験申込期間(TOEIC Speaking Testを除く)は公式サイトでご確認ください。

また、公開テストスケジュールは変更されることがございますので、最新の情報は公式サイトでご確認ください。

(※1)インターネットでの申込期間です。申込開始および締切時間、コンビニ端末申込については公式サイトでご確認ください。

(※2)インターネットでの申込期間です。申込開始および締切時間は公式サイトでご確認ください。



一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication
IIBC 公式サイト <http://www.iibc-global.org>

【お問い合わせ】

東京 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-5521-5901
名古屋事業所 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル Tel. 052-220-0282
大阪事業所 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル Tel. 06-6258-0222

【報道関係お問い合わせ】

広報室 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル Tel. 03-3581-4761